

できた。得るものは大きかった。

ところで、本書の題名となっている「人間の分際」とは、神父岩下壮一が後年よく口にした言葉であったという。「分際を知れ」とか、「分際をわきまえているか？」といった言い方をしたという。これは、現代の若い人たちにとっては、死語のようなものであろうか。日本語独特のニュアンスを持つ語であり、「単に身分を言いあらわすだけでなく、そこには蔑視、あるいは卑下の意識や感情が込められている」と著者小坂井澄は解説する。ある篤信の老人の回想を紹介して、本稿を終えることとする。“分際ということ、非常に重んじておられましたね。ですから、わたしのような下の者が、ちょっとでも差し出がましいことを言うと、むっとされた。ふだんは冗談で人を笑わせて、親しみやすい方でしたが、そういうときは、ひやりとするような鋭さを感じたものです。”

* * * * *

アレクシ・ド・トクヴィル著 松本礼二訳
『アメリカのデモクラシー』

(岩波文庫、全2巻4分冊)

法学部長 田中 正人

著者トクヴィルは、フランス革命によって没落した貴族の末裔である。1831年に内務大臣からアメリカにおける行刑制度視察の命を受け、9ヶ月にわたり当時の全米24州を精力的に見て回り、帰国後さらにイギリス視察を行った後に本書を執筆した。

当時のアメリカは、イギリスからの独立を勝ち取り、合衆国憲法を制定してから40余年後。南北戦争という内戦を経験することとなったとはいえ、独立革命後、いわば「更地」に人工的に自由と平等の民主国家を建設しつつあった。

他方、著者の母国フランスは、革命によっていったん王政が打倒されはしたものの、「暴走」からナポレオン帝政へ、さらに正統王朝派

による復古王政を経て、1830年の七月革命でより自由主義的な七月王政を迎えるという、歴史の重みゆえの変転を経験していた。

トクヴィルは、平等主義の悪弊として同質化が進行し、多様性が失われ、「多数者の専制」をもたらす危険性を指摘し、宗教がアメリカという民主国家の「道徳的紐帯」となっていると観察し、「民主的な諸国において、個人の独立の範囲が貴族制の国々と同じように大きいと期待してはならない」と警告し、「アメリカにアメリカ以上のものを見た」。

アメリカ民主政の実態と民主政の本質についてのフランス貴族による省察たるこの古典。200年近くを経た今、日本の若い学生諸君がこれを読むことは、時空間を超える知的遊戯の類に属するかもしれない。かつて私が学生だった頃は、井伊玄太郎による迷訳(現在は『アメリカの民主政治』講談社現代文庫)以外には、今回の岩波版と同じ松本氏と岩永健吉郎との共訳(抄訳)しかなかったが、ようやくまともな全訳が出たこととなる。

* * * * *

"日本そしてアメリカ合衆国"

経営学部長 村松 幸廣

現代日本の変化はすさまじい様相を呈している。格差のみならず、政治や組織のいたるところに見られる無責任体制は社会構造を蝕む状況にある。自己中と言われて久しいが、自己中心の傾向が、政治・経済・社会いたるところに見られる状況を看過できない。日本はどこに進もうとしているのであろうか。グローバル化、競争原理の導入による弊害は日本の良さを失わせている。

それは、戦後の急速な高度経済成長とバブルの経験に起因するものである。日本の発展は、欧米の後追いであり、なかんずくアメリカのコピーである。高度成長期は人類の歴史的偉業であり、経済的な平等社会を短期的に

実現してきた時代である。普通の人々が豊かさを享受できた時代である。それは、企業が従業員とともに協調して成し遂げたのである。

しかしながら、世界に類を見ない労働組合との協力関係は、時として組織を危機におとしめることになる。「破滅への疾走」(高杉良著)は、日産自動車の会長(川又克二)と労働組合・自動車労連会長(塩路一郎)の自己利益的な意思決定と権力闘争の醜さとを見事に分析し表現している。「鑄は鉄より生じ、やがて鉄そのものを滅ぼす」という明言は、組織が経営者やリーダーの資質にいかんにか依存しているかを如実に示している。伝統的な日本社会において、滅私奉公の精神が守られてきた。現代では「公」とは「おおやけ」すなわち社会と解すべきであろう。日本の社会においては、「おかげさまで」の他者を思いやる精神は、消滅しつつある。他人の存在など無視し、踏みつける状況すら存在するのである。ITバブルの落とし子であるライブドアのホリエモンなどはその典型であろう。

高杉良は徹底した自己取材による資料の解析を通じて、小説に登場する人物行動の個性的表現と入念な心理描写によって臨場感を醸し出している。高杉良は、経済小説といわれる分野の先駆者であり第一人者である。彼は、企業とビジネスの不合理さや冷たさに焦点を当て、組織の非人間的側面をえぐり出し、倫理の大切さを強調している。現代社会に生きる者として、ビジネス社会の在り方に警鐘を鳴らしている彼の声に、今こそ耳を傾ける必要があるだろう。

日本は、良きにつけ悪きにつけ、アメリカ社会を後追いしている。現在の格差社会が、これからも、急速に悪化することは予想に難くない。10年後の日本の姿を想定しうる予言の書として、「ルボ 貧困大国アメリカ」(堤未果著)も一読していただきたい。

社会の変化を鳥瞰し、自己の人生観に思いを持つことは、何のしがらみもない学生時代にこそ成しうることができよう。

* * * * *

高橋 孝助著

『飢饉と救済の社会史』

(青木書店 2006 年)

現代中国学部長 馬 場 毅

本書は1876年から1878年にかけて起きた、日本では従来注目されることのなかった中国近代史上の大旱魃と飢饉状態およびそれに対する救済活動を取り上げたものである。

ここに描かれているのは、第1に大旱魃と飢饉の実状である。そこでは、餓死者が相次ぎ、生き残ったものは草や根を食べ尽くし、ついには人肉を食べたという悲惨な状況、さらに飢饉線上の彼らは難民として、幽鬼のように都市部へ移動していく。そしてその過程で親が手放す子供を買い取る人買いが横行する。都市に行っても官側および都市住民は、難民を無頼の民と同一視し、都市の社会秩序を守ることを第一義的に追求するという当時の苛酷な実状が描かれている。

第2にこのような惨状に対しての懸命の救済活動の実情が描かれている。清朝側の官も穀物を確保し、実際に飢饉地域に届いたものは少量であったが、飢饉地域に穀物を輸送しようと試みている。また官側と協力しながら救済に立ち上がった善士と呼ばれる人々、さらに当時の排外的風潮の中で、命がけで救済に携わったキリスト教の外国人宣教師の姿が描かれている。善士は義捐金で、婦女を人買いから買い戻したりし、外国人宣教師は、孤児を収容施設に収容し縁者に引き取らせたりして、懸命の救済活動をしている。このような官や善士や外国人宣教師などの救済活動の叙述の箇所は、本書の魅力を際立たせている。

自然災害による飢饉とその救済という本書のテーマは、単に19世紀後半期だけではなく古代から現代まで通じるテーマであり、特に1958年から始まる大躍進運動はその政策的誤りと自然災害も加わり、多くの餓死者を出した。このような現代中国の問題を考えるにも示唆を与える本書を学生諸君に勧めたい。